

「精読」と「多読」

—読書の秋、本に親しもう—

開倫塾

塾長 林 明夫

- (1)おはようございます。開倫塾塾長の林明夫です。今朝も「開倫塾の時間」をお聴きいただき、ありがとうございます。

8月に続いて、今年の9月は本当に暑かったですが、ようやく涼しくなってきましたね。やっと秋めいてきましたので、このまま秋に入ればいいなと思います。秋ですので、今回は読書についてお話させていただきます。

(2)以前にもお話させてもらいましたが、読書をするには、2つのやり方があると思います。本を詳しく、詳しく読む「精読」と、たくさんの本、多くの本を読む「多読」です。詳しく詳しく読む「精読」の「精」は精密の「精」で、米偏(こめへん)に青と書きます。今日は、この詳しく詳しく読む「精読」と、たくさんの本を読む「多読」という2つの読書の仕方と、どのように取り組めばよいかについてお話します。
2. 大事な本や初めて読む本、初めての作家の本を読むときには、1冊をゆっくりゆっくりとじっくりじっくりと読んだほうがよいと私は考えます。例えば、私の大好きな村上春樹という作家の小説の本を初めて読むのであれば、代表作の「ノルウェイの森」をまずはじっくりと読む。ことばの意味を一語一語確かめながら、「ノルウェイの森」という1冊の本をじっくりと読むことをお勧めしたいと思います。その読み方は、学校の教科書を学ぶように、一語一語の意味を確かめながら正確に精密に読むのです。そして、一語一語、一文一文、一章一章を「これはこのような意味なのか、内容なのか」と納得しながら1冊の本を読み終えるのです。もし意味のわからない語句に出会いましたら、村上春樹の本であっても難しくわからない言葉があると思いますので、おっくうがらないうで、また、気軽な気持ちで辞書でその意味を調べるといことも、初めての作家の本を読むときには欠かせないと私は思います。
3. 小説ではなくエッセイや知的な関心を深めるような本であれば、キー・ワードだけでもノートを取りながら1回読む。作者が何を言いたいのかがわからなかったら時間をおいて2回・3回読む。本によっては5回・6回読む。このように、少し難しめの本であれば何回か読み返すことも「精読」には欠かせないと思います。これから読みたいという作家がいましたら、その作家の本を学校の教科書を読むようなつもりで、また、知的な関心を深める本であれば、学校で1つの科目を学ぶのと同じように、正確に精密に本やテキストを読むというのが「精読」だと私は思います。
4. また、日本や東洋、世界の古典のような作品を読むときにも、同じように「精読」の方法で詳しく詳しく読むほうがよいと思います。先日、ドイツの有名な作家であるヘルマン・ヘッセの「車輪の下」という本を読みました。非常によい本でした。ヘルマン・ヘッセの本を読むのであれば、代表作の「車輪の下」を1回ではなく、ゆっくりと2回・3回と読んでから次の作品に進むのも一つの読み方かもしれません。このようにして最初の作品は少し詳しく読む「精読」をして、「精読」が終わったら、例えば、村上春樹という作家であれば非常に多くの作品を書いていますので、ほかの本をどんどん読んでみる。ヘルマン・ヘッセであれば、ヘルマン・ヘッセのほかの本を読んでみ

るといふことも興味深いと思ひます。つまり、1人の人が著した1冊の本を「精読」したあとに、その人の書いた本を次から次へと読むことが「多読」の一つの方法だと私は考へます。

5. もう少し例をあげて御説明します。私は夏目漱石や、夏目漱石の友人であつた正岡子規の本を読むのが好きです。夏目漱石や正岡子規の本を何冊か丁寧(ていねい)に読むと、少しずつですが夏目漱石という人がわかつてきたり、正岡子規という人が少しずつわかつてきたりします。ですので、そのあとは夏目漱石の書いた本をできるだけたくさん読もう、正岡子規の書いた本をたくさん読もう、というような読み方もよいと思ひます。
6. 栃木県には田中正造という足尾鉍毒事件で活躍した素晴らしい先人がいらっしやいます。田中正造の本を読むのなら、1冊を丁寧に読み、そのあとに田中正造全集などの違ふ本を読む。
7. また、二宮尊徳という素晴らしい方が栃木県でも活躍しましたので、例えば「二宮翁夜話」という代表的な本をゆっくりと一度読む。これが「精読」です。そのあとに二宮尊徳先生が書かれたほかの本を何冊か読んでみる。このように本を読むことが私は「多読」だと考へます。
8. 興味・関心に合わせて1冊か2冊「精読」をする。ゆっくりゆっくりと学校の教科書を読むつもりで読んで、その人の考へ方に少し慣れ親しむ。その人についても少し勉強したりする。そして、それが終わつたら、順次その方の本を少しずつ読んでもっともっとその作家の著作への理解を深める。このようなことをするとおもしろいかなと思ひます。
9. 「精読」もお勧めですが、さらにお勧めしたいのは「多読」です。本をたくさん読むと世界が一気に広がります。

私はスペインの現代文学も好きで、スペイン在住の木村裕美さんという翻訳家の先生が翻訳をなさつた本を少しずつ読んでいます。木村先生は、バルセロナを中心に中世から現代にかけての歴史物や現代の小説をたくさん翻訳しています。木村先生の翻訳した本をたくさん読むことによって、スペイン、とりわけバルセロナの中世から現代の様子が非常によくわかつてきます。同じ翻訳家の先生のもので非常に自分自身に馴染んでいきますので、スラスラスラスラ読めて非常にいいなと思ひます。
10. また、私は樋口一葉も大好きです。「たけくらべ」や「大晦日(おおつごもり)」をゆっくりと読んだあとにほかの本を読んだり、東京下町の三ノ輪(みのわ)という所にあります「一葉記念館」に何回か行きますと、下町の様子が目に浮かんだり、また、樋口一葉のことがよくわかつてたりします。このように、時代や土地の制約を一気に取り払つて、世界を見る目を一気に広げてくれるのが「多読」ではないかと思ひます。
11. ただ、何回も言つて恐縮ですが、「多読」をしてこのような状況になるのは、何冊かの基本的な本を「精読」、つまり詳しく読んでからだと思ひます。ですから、ぜひ「多読」と「精読」を自分なりにうまく組み合わせをして、皆様の世界を一気に広げていただければと思ひます。
12. 秋ですので、今日は読書、詳しく読む「精読」と、たくさん読む「多読」のお話をさせていただきました。皆様はどのように読書をなさつておられますか。

— 2013年2月28日追記・改訂 林明夫 —